

私の旅史②【新婚子育て編】

旅のチカラ研究所

2021 年 5 月

旅のチカラ研究所 植木圭二

私は旅のチカラ研究所を設立するまでは旅行記を残していない。そこで研究所設立の 59 才までの私の旅の歴史を「私の旅史」として残すことにした。それは「夢多き青春編」、「新婚子育て編」、「ナイスミドル編」として、旅という切り口で半生を振り返る。

この「新婚子育て編」では 26 才の結婚から 40 才頃までとし、結婚は生活だけでなく旅においても劇的な変化が生じて独身時代とは全く違うものになった。

第一章 新婚時代

■新婚旅行

私たちは 1982 年 4 月に結婚し、私はその時 26 才で妻もほぼ半年後には同じ年齢になる。当時では比較的早い結婚だったと思う。それは私にとっては早く両親を安心させたいという気持ちがあり、兄が亡くなった時に両親への親孝行を亡き兄に約束したこともその一因かもしれない。

新婚旅行は結婚式の翌日に日本を離れヨーロッパに渡り、フランスとスイスを旅するというこゝとで当時としては豪勢な方だった。ヨーロッパを選んだ理由は学生時代の飲み仲間「鍋会」の友人の一人がヨーロッパ旅行をしたことで、“それなら私も”という、今思うと対抗心からかもしれない。実はその友人は私の日本一周旅行に刺激されてヨーロッパに行ったというから面白い。

その友人が乗っていた大韓航空機がヨーロッパからの帰途でソビエト連邦上空を侵犯した疑いで戦闘機に機銃掃射されシベリアに拉致されたということもあった。

新婚旅行が実は私にも妻にも初めての海外旅行で、大手旅行会社 JTB のパックツアーを利用した。旅行代金は一人 44 万円でオプションツアーや土産物などを含めると二人で 130 万円くらいになったと記録が残っている。それは今までの旅行とは桁の違う額だった。そのためか、憧れのヨーロッパに降り立って私が妻に言ったのは「もう二度とヨーロッパには来られないから、しっかりと目に焼き付けておこう」と言葉だった。

フライトは今ではとても信じられないアラスカのアンカレッジ経由だった。日本からヨーロッパに行くにはシベリア上空を通過するのが最短なのだが、当時は冷戦時代でソビエト連邦が自国の上空を飛ぶことを許さなかったので、日本からヨーロッパへ行くほとんどのフライトはアンカレッジ経由だった。それはまず日本からアンカレッジまで飛び、そこで給油してから北極上空を飛んでヨーロッパに行くのでノース・ポール（北極）ルートとも呼ばれていた。このルートでなければ南回りルートになり、恐ろしく時間がかかる。

ちなみに東京からアンカレッジには最短コースで飛んでもソビエト連邦の領土上空を通過することはないが、韓国のソウルからだと最短ルートはぎりぎりそこを通過する。燃料を節約するにはなるべく最短ルートを飛行したいので、友人の乗った大韓航空機はきわどいところを飛んだのかもしれない。

私たちの結婚式は大安吉日で、その翌日に新婚旅行に出発したので同じツアー客の中には私たちと同じ結婚記念日の新婚カップルが多くいた。そしてこの時に知り合った 2 組の夫婦とは旅行の最初から仲良くなった。

そしてこの 2 組の夫婦とは現在でも付き合いがある。

フランスではパリ市内を見学した。ベルサイユ宮殿、凱旋門、シャンゼリゼ通り、ルーブル美術館、モンマルトルの丘、ノートルダム寺院、などパリの有名な場所は一通り巡った。

自由行動では、仲良くなった新婚 3 組でメトロ（地下鉄）に乗って市内散策を楽しんだ。生まれて初めてのパリの地下鉄は、日本に比べてお洒落だったことを思い出す。



【ベルサイユ宮殿にて新婚 3 組】

その時に偶然見かけたのがセーヌ川に架かる橋のたもとの公園にある「自由の女神」だった。私はニューヨークにあるだけと思っていたが、これが原型なのかと話しながら見学したことを思い出した。

しかし帰ってから調べたら、フランスがアメリカ合衆国の独立 100 周年を祝してニューヨークに自由の女神を贈呈し、その返礼としてフランス革命 100 周年を祝して贈ってもらったのがパリの自由の女神だと分かった。従って原型ではない。一緒に見た 2 組の夫婦は私の言った“原型説”を信じてどこかで吹聴していたら申し訳ないことをした。

ニューヨークのものは 1886 年、パリのものは 1889 年完成で 3 年しか離れていない。私たちが訪れた時は完成後 93 年経っていた。



【ロワール地方の古城 シュノンソー】

パリ郊外の城が多く点在する有名なロワール地方に行った。私はこの時に生まれて初めて本物の西洋の城を見た。シュノンソーやシャンボール、とにかく豪華で綺麗だった。

今ならば、どうして同じ城なのに日本とヨーロッパとではこんなに違うのだろうかという疑問を持つが、当時はそんなことは全く考えなかった。何しろ新婚旅行で初めての海外旅行、それもヨーロッパだ。驚き、そしてはしゃぐばかりだった。

今思うと海外旅行初心者だからこそその感動だったのだろう。最近の私はそういう感動こそとても重要なものだと感じている。

どうしたらあの新鮮な感動を得ることができるだろうか。そのためには常に新しいこと自分の知らないことに挑戦して刺激を受け、喜びそして驚き感激して、素直な気持ちになってそれを口に出してあるいは体を使って表現することかもしれない。本来、世の中は感動で満ち溢れているはずだ。それを見過ごしているだけかもしれない。

フランスが誇る高速鉄道 TGV に乗った。TGV は 1981 年 9 月に開業なので私たちはその約半年後に乗ったことになる。

日本の新幹線は東京オリンピック開催の 1964 年開業なので 17 年も先行して営業しており、改めて日本の新幹線の凄さを思い知ることになった。この頃は日本の経済力や技術力が他国を寄せ付けないスピードで進化発展していた時代だ。

TGV はフランスらしい斬新なデザインで技術ではなくセンスに私は感動を覚えた。



【TGV の前で】

フランス東部のスイス国境近くの街、シャモニーからモンブラン観光に行った。モンブランは大学時代に企てた大旅行計画の目的の山だ。その計画とはシベリア鉄道でヨーロッパに行きモンブランに登頂してジープでシルクロードを帰ってくるという、あのとんでもない計画だ。当然その計画は実行されなかった。

モンブランはアルプス最高峰で標高 4810m もあって簡単に登れない。そこで一般的な観光コースではモンブランの隣の山「エギーユ・デュ・ミディ」にロープウェイで登り、そこからモンブランを眺める。モンブランの雄姿を見るためにはモンブランではなく隣の山に登るということはいまもったもな話だ。

しかしこの山でも標高は 3842m もあり、富士山よりも高い。そんな高い場所にロープウェイに約 20 分間乗るだけで到達してしまうことに驚いた。これがヨーロッパ、世界レベルの観光地ということだと実感した。

山頂駅の標高は 3777m ということで頂上よりだいぶ下にあるが、この高さでも今まで私が地面に足を付けた最高標高地点の記録になっている。

モンブランは頂上付近がなだらかで見た目は女性的な山だが、独特の存在感がある。フランス語でモンブラン (Mont Blanc) とは「白い山」という意味で、確かに頂上は雪で真っ白、しかもなだらかで丸かった。



【エギーユ・デュ・ミディからモンブランを背景に撮影】

当時は日本人観光客が多く訪れており、至るところで日本語を聞くことになった。今では世界のどこに行っても中国人観光客がいるのと同じだ。

そして現在の中国人のマナーは決して良くないことと同様に、当時の日本人も同じだった。歴史は繰り返すのだろう。

初めての海外旅行は景色や建造物に感激しただけではなく、食事もチップも何もかもが新鮮で驚きの連続だった。それは頭の中ではある程度予想していたが、現実に体験すると全く違う感覚だった。

その中でも国内旅行と決定的に違うと当時感じたのは、以下の 3 つだった。

まずは言葉、日本語が通じないのは言うまでもないが、英語があまり通じない。大学を卒業して 3 年しか経っていない頃なので私の英語力は今よりも確かなものだったが、通じない。外国へ行ったらどこの国でも英語が通じると思っている日本人は多く、私もその一人だった。昔の日本人にとっての外国とは、ハワイやグアムをはじめとしたアメリカ合衆国だから、外国人は皆英語を話すと思っていた。ただ最近では当時に比べれば英語が通じるようになっている。それはインターネットの普及やグローバル化によって英語が完全に世界の共通語になったからだろう。しかし残念ながら私の英語力は退化している。

次は通貨だ。フランスもスイスも違う通貨なのは分かっていたが、両替をして現地通貨を手にして本当に外国なのだという気持ちになった。それでも貨幣価値についてはピンとこない。今ならば 1 ユーロは 100 円よりも少し高いと計算することもなく直ぐに出てくるが、フランスのフランもスイスのスイス・フランも全く馴染みがなく、電卓片手に買い物をしていた。それは今でもユーロとドルが使えない地域では似たようなものかもしれない。

最後は時差だ。これは海外それも飛行機で行く欧米だからこそ発生する問題で、今でも決して慣れることはなく致し方ない。

この 3 つについては国内旅行では絶対に体験できないことだった。

苦勞しながらも楽しんだ初めての海外旅行で私が思ったことは「海外旅行というものは相当に面白いぞ」ということだった。その思いはその後の私の旅行人生を大きく変えていく。

フランスを離れモンブランの北西約 70km にあるレマン湖の畔にあるスイスのジュネーブに行った。湖から立ち登る高さ 140m という噴水がこの街のシンボルで、訪れたのが 5 月の初めという時季なので花が綺麗に咲いていて道にはゴミ一つ落ちていないことを今でも鮮明に覚えている。それは当時の日本では到底ありえない光景だった。大袈裟に言うと、違う惑星に来たのかと思ったほどだ。

結婚式の媒酌人だった私の恩師の奥様がとても旅行好きで、ヨーロッパの街、特にスイスの街はとても綺麗だからぜひ見てきなさいと言っていた。それは決して嘘でも誇張でもないことだったことを実感した。



【ジュネーブの公園にて】

■新婚生活は大阪

結婚しても独身時代に続いて 1 年間大阪に住んだ。独身寮を出て豊中のマンションに妻と移った。そして独身時代と同じように大阪、京都、奈良、神戸の関西各地を巡った。ただ新婚の妻も一緒だったので、何処に行っても何を見るにしても独身時代とは雲泥の差だった。

家の近くにあったお好み焼き屋には毎週のように通いつめた。このお好み焼き屋通いが、いずれ私がお好み焼きを焼く側にまわって、後の私の人生に大きな意味を持つてくることになる。

考えようによっては大阪での新婚生活は 1 年間かけて関西に新婚旅行に行ったようなものになった。

能登半島は大阪からも近いので、新潟に住んでいた大川夫妻と能登半島先端の鉢ヶ埼海岸キャンプ場で待ち合わせしてキャンプとセーリングを楽しんだ。

会社の卓球部で行う恒例の若狭湾の旅行には妻も加わって一緒に遊んだ。妻は慣れない大阪生活に多少の戸惑いがあった。当時は関東から来た人をあまり歓迎してくれない風潮があったが、卓球部のメンバーたちは関東から嫁いできた私の妻を暖かく迎えてくれた。

新婚旅行で知り合った 3 組の夫婦で伊勢志摩に行った。この時に初めて私は会社の保養所を使った。これに味を占めて以降は各地の保養所を使いまくることになる。

プライベートが充実すると仕事も充実する。

私は当時としては世界最先端技術の光ディスク装置の開発にたずさわっており、仕事は大変だったがやりがいも感じて楽しかった。

私の経験的な持論だが、仕事とプライベートは人生の両輪でどちらも充実していないといけない。片輪だけフル回転しても期待した成果は上がらず、結果として人生は充実せずに楽しくもない。バランスよくこの両輪を回転させることが重要で、だから私はどんなに仕事が忙しい時でも必ず旅行に行くようにしていた。

人生の成功者と言われる人たちは必ず仕事以外に趣味や特技などを持っている。そしてそのレベルは高く、プロ顔負けの人が多いは決して偶然ではないだろう。

■新婚旅行パートⅡ

1982 年 12 月、新婚旅行パートⅡと称してハワイに行った。ヨーロッパに行った新婚旅行から 8 カ月後だが、私の海外旅行の虫が騒ぎ始めた。そう「海外旅行というものは相当に面白いぞ」という虫である。そしてこの虫は今も私の中に住み着いている。

ヨーロッパ旅行で味をしめて次はどこか外国に行こうかと考えた時に、当時の新婚旅行先で人気ナンバーワンだったハワイが目にとまった。費用もそんなに高くなく往復の飛行機代とホテルが付いて一人約 15 万円、ヨーロッパに行った新婚旅行の 1/3 程度だった。

オアフ島に滞在して定番のワイキキビーチやアラモアナ・ショッピングセンターを楽しんだ。やはりハワイはアメリカ合衆国の誇るリゾート地で、ショッピングセンターの大きさには驚嘆した。今さら書く必要もないが、ハワイは温暖な気候なので植物やフルーツが豊富で、綺麗な海岸や街並みに感動した。当時の私のハワイの印象は、住みやすい気候や自然環境とアメリカ合衆国の富が共存している島、それはまさしくユートピアというものだった。ハワイを何十回と訪れる旅行者も多いが、現地に行ったらその気持ちが十分に理解できた。

そのユートピアで私はレンタカーでオアフ島一周という新しい挑戦を試みた。初めての海外での運転なので大きなアメリカ車ではなく日本の日産「フェアレディ Z」を借りた。それでも左ハンドルなので結構緊張した。異国での車の運転は当初は高いハードルと思ったが、それは越えてしまうとまた一つ自信が付き、改めて挑戦することの意義を感じるようになった。

帰途の空港で偶然にもテレビでお馴染みの欽ちゃん（萩本欽一）に出会い写真を一緒に撮らせてもらった。欽ちゃんは当時 41 才、人気絶頂期だった。そして意外に小柄だったことに驚いた。



【オアフ島 フェアレディ Z をバックに】



【空港にて欽ちゃんと撮影】

■新婚旅行パートⅢ

1983年2月、東京に戻るのが1カ月後に決まり大阪在住の地の利を活かして九州、中国、四国の西日本を巡る5日間の旅に出た。この旅を私たち夫婦の間では新婚旅行パートⅢと呼んだ。

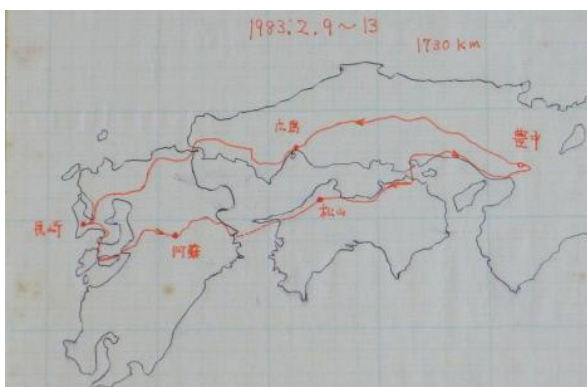
新婚旅行の時に二度とヨーロッパに来ることもないと言っていたのと同様で、この時も関西はともかくさらに西の九州、四国には今後は夫婦二人で行く機会はないだろうという思いがあった。

妻が群馬の実家で乗っていた車を嫁入り道具として大阪に持って来ていた。この車が我が家の初代マイカーになり、その群馬ナンバーのトヨタの「パブリカ」で西日本各地を巡った。

新婚夫婦の気ままな自動車旅行なので大まかなルートを考えて出発しただけで、行き当たりばったりの旅になった。宿も予約せずに、泊まる宿がなければ当時はモーテルと呼ばれていたラブホテルに泊まればよかった。これは新婚だから為せることで、とても男2人の旅では泊まる気にならない。その意味でも結婚によって私の旅は確実に広がった。

コースは大阪を出発し、ひたすら陸路で広島、岩国、長崎、島原、天草、阿蘇、臼杵、そしてフェリーで四国に渡り、八幡浜、松山、金毘羅山、高松から岡山の宇野へフェリーで渡り大阪に戻った。

学生時代に日本一周で行った場所も多く含まれていたが、妻にとっては初めての場所が多かった。5日間の走行距離は1730kmになった。



【新婚旅行パートⅢの行程】



【関門橋を背景にパブリカと私たち】

■親孝行の旅

1983年6月、結婚して1年が過ぎて大阪から東京に戻ってきたこともあり、私と妻の両方の両親を連れて6人で旅行に出た。「日本で一番きれいな海岸」というキャッチコピーの能登半島先端の鉢ヶ崎海岸を是非とも海無し県の両親に見せたかった。

当時としては珍しい7人乗りの日産の「プレーリー」のレンタカーを借りて、群馬県から能登半島に向かった。時間の節約と海を渡る爽快感を味わってもらうために糸魚川から能登半島先端の珠洲までフェリーで渡った。とても便利だったが、残念ながらこのフェリーは現在廃止されている。

鉢ヶ崎の海岸を見てもらい、見付島近くの国民宿舎能登路荘に泊まった記録が残っている。

世間では嫁の実家の両親と嫁ぎ先の両親が一緒に旅行に行くというのが非常に珍しかったらしく、その旅行のことを誰に話しても「とても信じられない」という言葉が返ってきた。

しかし私たちは、これ以降この組み合わせで数多く旅行することになる。



【能登に渡るフェリーの前で、両親たちと私たち】

■猪苗代湖キャンプ

1983年8月、大阪から東京に戻ってきて会社の後輩たちを連れて男女7人で猪苗代湖にキャンプに行った。もちろん妻も一緒に、ヨットも積んでいった。この後輩たちはキャンプ初心者、もちろんヨットも生まれて初めて乗るというメンバーだった。

彼らにとっては全く新しい体験だったのだろう、相当に感激したようでこの年以降も毎年同様にキャンプに行くようになった。場所は猪苗代湖を何回か繰り返し、そして佐渡ヶ島、能登半島と広がり、参加メンバーも年々徐々に増えていった。



【最初のキャンプ風景】



【夕食風景 後ろにヨットの船体】

当時のキャンプを振り返ると、小さな椅子で現在主流の肘掛け付きの椅子ではない。それでも大学時代のキャンプでは御座やシートに胡坐をかいて座っていたことに比べると進歩している。テーブルも低く、タープもない。プロパンガスコンロでの焼肉が主なメニューだった。

キャンプ以外でも交友を深まるイベントで、彼らを私の家に招いてホームパーティを頻繁に開くようになった。それには本場大阪仕込みのお好み焼きを私が焼いて、日本で手に入る世界中のビールを集めるという“ビールの祭典”のような飲み会になったので「BEER '86（西暦年号）」などと称した。これが数年に渡って何回も開催され、私のビールの知識も経験も深まった。

このメンバーたちとはやがて家族ぐるみの付き合いに発展していった。

メンバーの中に双子の姉妹がいて、その結婚相手もその中にいた。そのため私は双子姉妹が同時に結婚する合同結婚披露宴の司会を頼まれた。

これは会場スタッフにとっても初めてなので新郎新婦と媒酌人の座席、紹介の仕方など普段は当たり前に行っていたことを常識や伝統と照らし合わせて工夫をしないといけなくなった。

例えば、新郎新婦と媒酌人夫妻を従来のような並びで、そのままひな壇に座ってもらおうと別々の媒酌人の夫妻が中央で並んでしまう。そこで姉妹が中央に並んで、その2人を挟んで新郎が外側に、さらにその外側に晩酌人夫妻が並んだ。司会者が両家を紹介する時には“御両家”ではなく“御三家”と呼び、来賓の紹介も“新郎の〇〇家の来賓”などと切りがない。

ウエディングケーキもひな壇の両側に2つ置かれた。これを見てスタッフは「これは、正月の門松ですね」と言っていた。門松ならばそれはそれで縁起がいい。

第二章 幼い子連れの30代前半

■会社の保養所

私が28才の時、長女が生まれた。当然のように生活も旅行も夫婦二人の時とは様変わりすることになる。

幼い子を連れての旅行は場所も宿泊施設もかなり限定される。その制約にある程度応えることができたのは勤めていた会社の保養所だった。保養所は施設や設備が充実しており比較的安価で泊まれて、宿泊客は社員やその家族なのでお互いが身内のように感じており、幼い子を連れて行っても安心できた。支配人やスタッフの対応はすこぶる良く、それは施設の目的が社員の健康維持とリフレッシュで、いわゆる儲け主義ではないからだろう。



【孫を中心にした保養所の夕食風景】

保養所は全国に 18 カ所あった。北から北海道の定山溪、蔵王、那須、新潟の石打、信州蓼科、湘南海岸の茅ヶ崎、熱海温泉、加賀温泉、琵琶湖、京都嵐山、大阪の吹田、神戸の六甲山、伊勢志摩、和歌山の白浜温泉、鳥取の大山、松山の道後温泉、福岡、別府温泉というように全国の観光の要所にあった。

それから 10 年も経たないうちに全ての施設に泊まった。場所によっては数十回も泊まった施設もある。

私たち家族だけで行くことはあまりなく、両方の両親と一緒にいくことが多かった。両親たちは群馬県に住んでおり、私たちは神奈川県なので普段は会えないので孫の顔を見せられて一緒に泊まることで両親は喜び、妻にとっては幼い子供の面倒を母親たちが見てくれるのでゆっくりできるので好都合だった。

双方にメリットのある、いわゆる **Win-Win** の関係というやつだ。イベントでもビジネスでも何事においてもこの形、**Win-Win** でないと長続きしない。

保養所の旅は両親だけでなく親戚、会社の友人家族、新婚旅行で知り合った人たち、大学時代の友人家族など、懇意にしている近所に住む人たちなど様々な組み合わせで行った。

誰をどの保養所に連れて行っても「この保養所はいいね、さすがに〇〇会社だね」という言葉を必ず聞いた。私が予約して案内しただけなのに、それが自分の手柄のようで嬉しかった。今考えると、その喜びが旅のチカラ研究所の設立につながったのかもしれない。

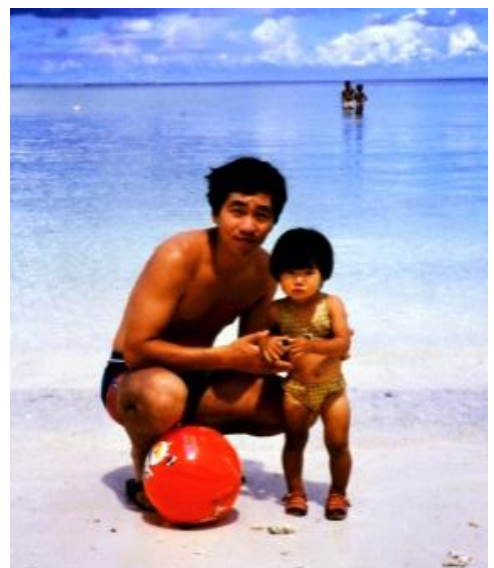
そして、この頃だけでなくその後も私の国内の旅行ライフにおいて保養所の存在は非常に大きくなっていった。

■グアム島

1985 年 9 月、娘が生まれて 1 才 4 カ月になったので家族 3 人でグアム島に行った。私が 29 歳の時である。もちろん下の息子はまだ生まれていない。

4 泊 5 日のグアムの旅はフジタモンビーチホテルに泊まった。このホテルは読売巨人軍が毎年キャンプに使っていたホテルだが、あまり豪華ではなく比較的質素だった。ホテル前のビーチにはたくさんのナマコがいたが、日本の海にはない雰囲気があった。

それよりも問題は飛行機で、成田発 21 時で約 4 時間のフライトだが時差が 1 時間あるのでグアム着は現地時間で夜中の 2 時になった。そしてホテルには 3 時頃にチェックインした。夜中のフライトは結構きつい。しかも 1 才児を連れており、泣き始めると周りの乗客に気を使わないといけな



【娘と私 グアム島にて】

帰国日はホテルを深夜 0 時にチェックアウトし、成田から来た飛行機が午前 2 時に到着して清掃や給油をして午前 4 時に搭乗し飛び立つので、空港ロビーの免税店などは夜中にわざわざ開けて営業していた。成田空港到着は朝の 7 時前になる。

それにしてもどうしてこんな深夜の離発着スケジュールが組まれているのだろうか、よくよく考えるとおかしいと当時思った。

来島日は夜中に空港に着いてホテルは 3 時頃にチェックイン、離島日は 0 時にホテルをチェックアウトしている。つまりこの日のホテルは同じ部屋を来島者と離島者にダブルで提供していることになる。宿泊費もダブルで、これが毎日繰り返されていた。ホテルに宿泊したのは正味 2 泊で、あとは 0.5 泊と 0.5 泊で実質は 3 泊だった。しかしこの時の旅行はフライトとホテルをセットにして 4 泊 5 日で募集していた。

他に何か理由があるのだろうか。今もなお分からない。

■サイパン島

1990 年 5 月、長男が生まれて家族 4 人でサイパン旅行に行った。私が 34 才、長女が 6 才、長男は 1 才 8 カ月だった。

今度は昼間便を利用して 3 泊 4 日の旅にした。この旅は土日の週末に 2 日間の休暇を付ければ実現できた。昼間の 4 時間弱のフライトは大人にも小さい子供にも大した苦痛ではなく帰国して翌日の仕事にもあまり影響しなかった。

サイパンではモーターボートをチャーターして綺麗な海の上を高速で快適な海上ドライブを楽しみ、旧日本軍の戦闘機が海底に眠っている姿を上から見たりもした。もちろん小さな子供たちは綺麗な砂浜の海辺で遊び、ホテルのプールでも存分に楽しんだ。明らかにグアムよりもサイパンの方が海は綺麗だったことを覚えている。



【チャーターしたモーターボート 家族 4 人】

それにしてもどうしてグアムやサイパンに幼い子供を連れて行ったのかというと、その理由は航空運賃にある。国際便は 2 才未満の子供は無料で、親が子供を抱いているので席を必要としないからだ。

国際便だけでなく年齢に応じて交通機関を選ぶと無料あるいは格安で行ける。国内便は大手航空会社では 3 才未満が無料になっている。鉄道やバスは小学校入学前の子供は無料で、指定席の場合を除いて着席しても構わない。さらに鉄道、バスは小学生になっても半額だから嬉しい。クルーズ船の場合は同じ船室ならば子供が無料あるいは半額になる場合が多い。子連れの旅はそれらの恩恵を最大限受ける交通手段を選ぶことが肝要かもしれない。

家族が増えてくれば家族全員で車に乗って移動した方がさらに安くなる。私たち家族の旅もそのような方向にシフトしていった。

費用のこともあるかもしれないが、子育てのストレスの発散のためとか、実は親たちが行きたいという理由の方が大きいかもしれない。問題は幼い子供たちの方で、無理やり海外旅行に連れて行かれた訳で、何も知らない子供たちにはいい迷惑だったかもしれない。

当時の写真や映像は残っているが、現在私の子供たちに当時のことを聞いても当然何も覚えていない。

第三章 家族旅行の 30 代後半

■コテージに泊まる

保養所の旅と並行して子供たちが大きくなるにつれてコテージやテントの旅が増えていった。

コテージに家族でよく泊まりにいった。大きなコテージを借りて、私たちの家族だけでなく様々な組み合わせで同じくらいの子供がいる家族で行った。

よく使ったラフォーレ修善寺は大人から子供まで楽しめた。広いリビングルームと 3 つの寝室、キッチンもあり自炊可能なので料理やツマミを持ち込んでパーティをすることが常だった。

大きな施設なので大浴場、アスレチック、スケート場、ゴルフ場、プール、体育館、そして結婚式場やチャペルまであった。そのためにテレビドラマの撮影にも多く使われ、ちょうどこの時期だったか、1991 年放送の武田鉄矢の「101 回目のプロポーズ」のラストシーンはここの教会だった。そのことを何故か自分の手柄のように私は同行者に自慢していた。

実は当時この施設に泊まると会社から補助金が支給されて、素泊まりならば一人 1000 円くらいで泊まることができた。こういう補助金制度は上手に使った者勝ちで、利用しない手はない。今でも会社や国や自治体から出る補助金の類は私の旅行においては重要なものになっている。



【ラフォーレ修善寺に行ったメンバー】



【ラフォーレ修善寺のコテージ内】

地域の自治会の役員仲間とその家族で三浦半島にある個人持ちの丸太小屋というログハウスを借りて、毎年クリスマスに訪れパーティを開いた。2階建ての大きなログハウスで20人くらい楽に泊まることができ、海岸近くにあつてあまり周りを気にすることもなく大きな音も出せる。もちろん暖房も完備されており、木のぬくもりが心地よい。大人数でクリスマスの夜を過ごすには立地環境も雰囲気といい抜群だった。

テレビがないので子供たちと一緒にゲームに興じ、大人と子供が一夜をログハウスで過ごすという新しいスタイルのクリスマス旅行になった。この催しは何年か続き、私のところには3年分の写真が残っている。



【ログハウス外観】



【ログハウス内部で記念撮影】

■オートキャンプ

キャンプは子供が小さいうちから連れて行っていた。まだ1才くらいでようやく歩くことができる年齢から始め、本格的に子供連れキャンプに行き始めたのは下の子供が3才くらいからなので、私が35才の頃からだ。

その頃の私は仕事が忙しい中でもなんとか時間を作ってキャンプに行っていた。改めて強調する必要もないが、学生時代からキャンプ大好きだった私は子供ができてからもキャンプに魅せられ続けた。焚火、料理、酒、自然とのふれあい、それに子供たちとのふれあいが加わった。

当時はオートキャンプが流行り始めた頃だった。オートキャンプは文字通り車で行くキャンプのことだが、従来型のキャンプに比べて豪華になったキャンプをそう称していたようだった。私が小さい頃のキャンプは別の言い方をすれば“野営”で、野宿に毛が生えたようなものだった。それに対してオートキャンプは自然の中で快適に過ごすために椅子、テーブル、コンロ、タープなどを持ち込み現地でリビングやキッチンを設定する。いわば文明を自然に持ち込むというものだ。さらに自転車や望遠鏡などの趣味を持ち込むという楽しみ方も多く見受けられた。私の場合はヨットやゴムボートを持ち込んだ。

会社の後輩たちとの夏休み恒例のキャンプも続いていた。さらに違う友人たち、近所の人たち、学生時代の仲間たちともオートキャンプに行った。家族帯同のキャンプが多くなって幼い子供たちも参加するようになったので、私の長女くらいの年代が下の子供たちの面倒見るという構図もできて、一つのコミュニティが出来上がっていくのも面白かった。



【大人数の夏のキャンプ】



【田貫湖 秋のキャンプ】

行く場所は、週末に手軽に行ける丹沢湖付近、道志川周辺だったが、それでも多く行ったのは風光明媚な富士山周辺の富士五湖、その中でも最も遠い本栖湖が多かった。

富士五湖ではないが、富士山の西側の静岡県の田貫湖にもよく行った。ここは4月と9月頃に「ダイヤモンド富士」が見られるので有名だ。ダイヤモンド富士とは富士山のでっぺんから日が昇り、それは湖面に映っている逆さ富士も同様なので上と下から光が輝いていることからそう呼ばれている。日本でそれが見られるポイントはここしかない。

オートキャンプには車1台とテントスペースが用意された、いわゆる“区画”があるところが多かった。予約できるように管理しようとするとしてもその区画という概念が必要になるのは理解できるにしても、それは私にはあまりにも味気なく感じた。今も区画を採用するキャンプ場は多いが、私は一貫してそのような区画のあるキャンプ場には行っていない。その理由はオートキャンプとは大自然の中に文明を持ち込み、そこで自然と融合した生活を楽しむものであって、線引きされた区画では日常と変わらない。そもそもキャンプの目的は非日常を楽しむためだという明確なポリシーを持っていた。それは今も変わっていない。

しかし区画が無ければ無管理状態の場合が多く、季節の良い時季の週末は混雑する。私はその混雑したキャンプ場を避けるようになり、徐々に遠いキャンプ場を目指すようになり、この流れが後の極寒キャンプに繋がっていく。

■エスティマ

1992年、それまで乗っていた我が家の2代目マイカーのトヨタの「カローラ FX」から同じくトヨタの「エスティマ」に買い替えたのが、私が36才の時だ。これによって旅行の幅が相当に広がった。

実はエスティマの購入は当時相当に悩んだ末のことだった。何を悩んでいたかということとキャンピングカーを買おうかと本気で検討して半年近く悩んでいた。この検討も後になって私のキャンピングカーの知識の蓄積に役に立つことにはなるが、それは先のことである。

そんな時、「エスティマ・ルシーダ」という車が発売された。ディーゼルエンジン、座面がフラットになる8人乗り仕様のものが用意された。悩んだ末にこの車に落ち着いた。それは予算の問題、特に駐車場を2つ持つことができないので買い物や通勤を1台でこなす必要があった。

エスティマの威力は絶大で、キャンプはもちろんのこと両親を連れての旅など大人数が1台の車で移動できるのでとても重宝した。後ろの席をフラットにしてビデオ付きのテレビを設置したので移動中でも子供たちは飽きることがなかった。それは当時まだチャイルドシートの法規制がなかったことも幸いした。

以降エスティマで多くの旅に出ることになり、結局エスティマは10年間、20万km乗った。

■新たな日本一周旅行

30代後半の私はキャンプと保養所と知人の家に泊まる大型旅行を企画した。それは4年越しの日本一周計画だった。1991年から1994年にかけて仕事も忙しかったこの時期に夏休みを最大限に活用して家族で日本一周を4回に分けて実行した。

1991年の夏、私は35才、妻は34才、娘は7才、息子は3才で、旅行の形態がそれまでの幼い子連れの旅からアクティブな家族旅行へと変わってきた。

今考えても夏休みを利用しての4分割日本一周の企画は面白い。これならばやる気があればどの家族でもできそうな気がする。

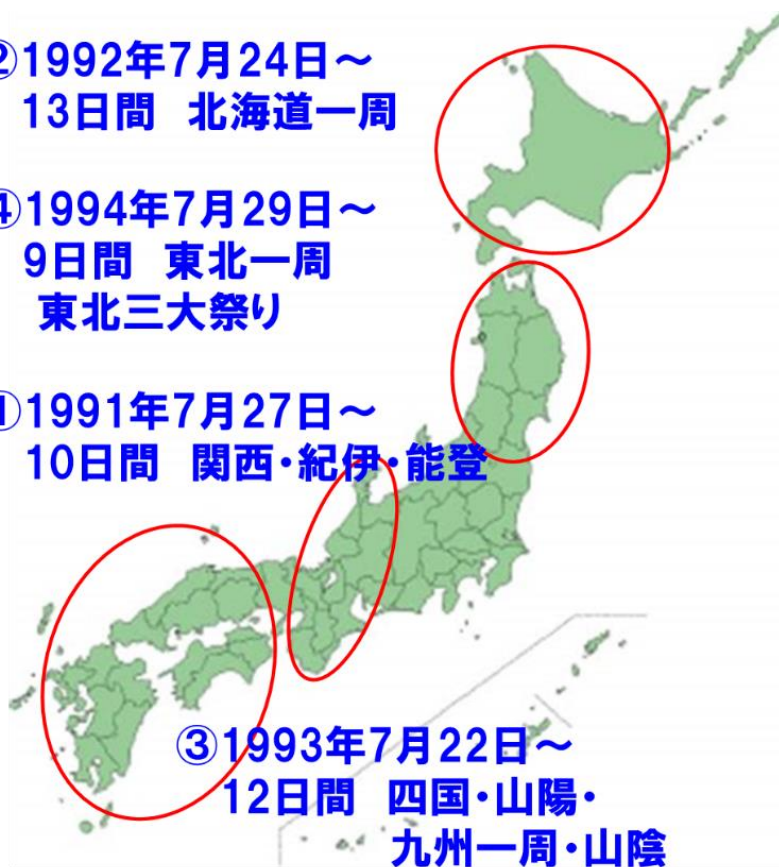
キャンプすることで自然とのふれあいもあり、何よりも安く泊まれる。知人宅に時々泊まることによって交友を深め、保養所に泊まることによってくつろぐこともできた。

②1992年7月24日～
13日間 北海道一周

④1994年7月29日～
9日間 東北一周
東北三大祭り

①1991年7月27日～
10日間 関西・紀伊・能登

③1993年7月22日～
12日間 四国・山陽・
九州一周・山陰



【4年に渡る日本一周】

①1991年7月27日から10日間で関西・紀伊・能登

当時滋賀県の大津市に住んでいた友人の大川宅に泊めてもらった。彼は大学時代に日本一周旅行に一緒に行った仲で、あれから約15年後に再び4分割日本一周の旅が始まった。

大津に泊まった後に有名な奈良の十津川の吊り橋を見上げてキャンプし、熊野を越えて南紀白浜の真っ白な白良浜の海岸で海水浴を楽しんで、白浜の保養所に泊まった。大阪に行き、かつて新婚時代を過ごしたマンションにも立ち寄った。9年ぶりに訪れた新婚時代の街並みは懐かしかったが、ずいぶん変わっていた。京都に行って嵐山の保養所に泊まった。

最後は能登半島鉢ヶ崎海岸のキャンプ場で再び大川家族と合流して1泊、その後に会社の同僚やその家族たちも合流して結果3泊した。この時のキャンプは子連れの家族に独身者も加わって30人くらいの多人数になった。定番のBBQに加えて、地元の魚屋で新鮮な魚の刺身を買ってきて、ご飯を炊いて日本海の海の幸を食し、日本で一番綺麗な海岸のキャンプを堪能した。

②1992年7月24日から13日間で北海道一周

これがエスティマの遠距離ドライブのデビューの旅になった。

東北地方を一気に走り抜けて十和田湖でキャンプ、大間から津軽海峡を渡って函館に入り、大沼のキャンプ場に泊まり、翌日は長万部公園のキャンプ場に泊まった。このキャンプ場は芝生の広い公園で、キャンパーも少なく何よりも当時のキャンプ場では珍しい水洗トイレを完備していた。風呂は近くの長万部温泉を利用した。この温泉は結構熱かったが、ひなびた感じの温泉施設が実に風情があった。



【3代目マイカーのエスティマ 北海道大沼】

洞爺湖や昭和新山を見て札幌近くの定山溪の保養所に2連泊した。ここを拠点に札幌市内を散策して時計台、道庁、北海道大学、雪印パーラーではアイスクリーム、サッポロビール園ではジンギスカンを食べ、美味しく生ビールも堪能した。

羊ヶ丘から富良野のラベンダーを見てから、十勝岳温泉の下の銀山壮キャンプ場に泊まった。このキャンプ場は標高1000mの高所なので夏とはいえ結構寒かった。帯広から池田町のワイン城のレストランで豪華な食事をして屈斜路湖でキャンプした。摩周湖から野付半島に行き、北方領土の国後島を見て、羅臼から知床半島を横断して網走湖キャンプ場に泊まった。そこから一気に宗谷岬まで行って、日本最北端の地に立った。

その後に南下して豊富町の兜沼公園のキャンプ場に泊まった。この兜沼キャンプ場の設備と景色は本当に素晴らしかった。適度に木立があってその木立の下に広がる芝生がとても綺麗で、何よりも広かった。そして兜沼の向こうには遠く日本海に浮かぶ利尻島の利尻富士が見えた。それまで、そして今でも私が泊まったキャンプ場で1、2を争うほど素晴らしいキャンプ場だ。

サロベツ原野、羽幌サンセットビーチを経由して小樽に行き、小樽からフェリーに乗って翌日新潟港に着いた。北海道から新潟に行く日本海のフェリーは太平洋側に比べて運賃が半額程度なので、浮いた運賃で部屋の等級を上げて快適に過ごすことができた。

この旅行では定山溪の保養所2泊とフェリー泊以外は全てキャンプ泊という旅になった。それほど北海道のキャンプ場は快適で、立ち寄りの温泉も多くあり、食事もラーメンや寿司、海鮮丼など十分に堪能した。やはり北海道の夏はキャンプが合う。

③1993年7月22日から12日間で四国・山陽・九州・山陰

車で家を出て西へ向かい神戸の保養所に泊まり、淡路島経由で四国に入った。そして瀬戸大橋経由で広島県の尾道を経て三原に行った。

三原では会社の元上司の家に連泊させてもらった。元上司は家族の事情で会社を辞めて夫妻で三原に住んでいた。夫妻は私たち家族を歓待してくれた。それは例えば瀬戸内海に釣り船をチャーターして釣りに興じさせてもらった。これは私にとって、もちろん私の家族にとっても初めての海釣りになった。子供たちも一人前に釣りを楽しんで結構釣り上げていた。釣った魚や漁船で獲れた新鮮な魚がその日の食卓に並んだ。元上司夫妻には本当に感謝だ。

この時に感激した経験により、どうやったら遠方から来た友人に喜んでもらえるか、その地域でなければできないことを体験してもらうということを学んだ。



【元上司夫妻、その友人たちと釣り船にて】

関門海峡を越えて福岡の保養所に泊まり、吉野ヶ里遺跡、ハウステンボス、雲仙、島原、天草、熊本、霧島、えびの高原から鹿児島市内に入った。

鹿児島では元上司ではなく今度は元部下の家に泊めてもらった。彼は私の下で働いていたが家の事情で会社を辞めて鹿児島に戻っていたが、家族総出で私たちを歓迎してくれた。鹿児島では来客を歓迎する時は地鶏を一羽絞めてさばいてくれると彼から聞いていたが、まさしくそうしてくれた。料理も酒も美味しく、私は飲み過ぎで翌日の運転は妻に代わってもらう羽目になった。

そして桜島、佐多岬、青島海岸、日南海岸、綾の里、椎葉を巡り高千穂でコテージ泊、阿蘇、湯布院を巡り別府の保養所に宿泊した。国東半島から関門トンネルを抜けて山陰の青海島、そして萩の民宿に泊まった。さらに津和野、日御岬、出雲大社、宍道湖を経由し、大山の保養所に泊まり鳥取砂丘を見て北陸経由で帰宅した。

キャンプ道具は持っていったが、使うことはなかった。当時の私の経験から西日本は東日本に比べてキャンプ場は充実していなかったからだ。ただし現在は分からない。

④1994年7月29日から9日間で東北一周・東北三大祭り見物

東北地方の夏祭りをメインテーマにした旅になった。青森ねぶた、弘前ねぶた、秋田竿灯、仙台七夕を体験した。

青森県は大学生の時に忙しい年末なのに見ず知らずの私を快く泊めてもらった思い出もあり、人々は親切なことは百も承知しており恩返しのつもりで重点的に巡った。しかし青森県はそれだけではなく興味深い土地柄で、言わば“文明の十字路”のような場所だと分かった。

十字路のまず縦のラインとは、かつて東北地方までが日本で北海道は蝦夷地という外国だったので青森は日本と蝦夷地を結ぶ場所だった。従って現在の青森は東北と北海道の良さを併せ持つという一種独特の雰囲気がある。

十字路の横のラインは、青森県は東西に大きく2つに分けられる。これは昔治めていた藩が違っていただけで、太平洋側と日本海側とで気候も異なり風土や風習も違う。

弘前市中心に青森市も含む県の西側は津軽地方と呼ばれ、日本海側なので雪深く、辺境の地である。太宰治の小説「津軽」では「本州の極地、あとは海に転げ落ちるばかり、ここは本州の袋路地だ」と書かれている。私たちも太宰治ゆかりの金木町に立ち寄って、十三湖、竜飛岬を見た。やはり辺境の地だった。

県の東側が八戸市を中心にした三八上北（さんぱちかみきた）地方で、雪はあまり降らず海産物にも恵まれている。私たちは下北半島の恐山、薬研温泉、仏ヶ浦、小川原湖に行った。

薬研温泉でキャンプした時に早朝のキャンプ場に大間の港から青年団が生きたイカをたくさん持って来て、その場で焼いてふるまってくれた。イカの足とワタ（内臓）を一緒に炒めてくれたのが実に新鮮で美味かった。やはり青森の人は温かく優しいかった。

夏泊半島はホタテの産地なのでキャンプ場近くの店で安く売っており、生きたいいホタテを七輪で焼き、醤油と日本酒を垂らして食べた。これは言うまでもなく絶品だった。



【薬研温泉のイカ】



【夏泊半島のホタテ】

青森ねぶた祭りの時は青森市内では簡単に宿が取れないので、郊外のキャンプ場に泊まって青森駅の隣の駅まで車で行ってそこから青森駅まで鉄道を使って行った。この作戦は見事に的中したのでこの旅以降も色々な場面でこの手法を使うことになる。

私が初めて体験した青森のねぶた祭りは躍動的でエネルギッシュだった。対比するように弘前のねぶた祭りは神聖で勇猛な感じがしてこれも良かった。この2つの祭りはセットで見初めて青森を理解できるような気がした。聞くとおとよは北海道へ蝦夷征伐に出発する兵士を送り出すのが弘前ねぶたで、ねぶたの後ろの絵には送り出す女性の姿が描かれている。そして勝利の凱旋が青森ねぶたで、勝利を祝って飛び跳ねるハネトの踊りが祭りを盛り上げる。

青森の感動は鮮明に覚えているが、残念ながらその後に行った秋田の竿灯、仙台の七夕はあまり記憶に残っていない。

以上、4回分の日本一周の合計日数は44日間、合計費用は約65万円になった。家族4人の交通費・宿泊費・食費、そして観光全ての費用の合計なので安くあがったと思う。

この44日間日本一周65万円の旅と、大学生の時の50日間日本一周75万円の旅とは奇しくも期間（日数）と費用（万円）の比率がどちらも概ね2:3と似ている。小さな子供含めた家族4人と学生3人は同じようなもので、交通手段も車で泊まった場所も似ている。ということは1年間かけて夫婦で同様な手法で日本一周をしたならば400～500万円で行けることになる。

■両親を連れた東北旅行

1994年9月、エスティマの威力を最大に活かして私たち家族と私の両親、妻の両親と一緒に東北巡りの4日間の旅に出た。この旅もメインは青森県にした。

群馬県を出発し青森まで一気に北上し、ランプの宿で有名な「青荷温泉」に泊まった。この宿は現在とても有名だが、当時はそれほどでもなかった。ランプだけで生活する味わいのある宿なので、子供たちはもちろん両親も喜んでくれた。ランプは各部屋に1個ずつ、廊下や食事处にはかなりの数が配置されており、このランプの管理だけでも専門の従業員がいた。

もちろん電気が来ていない宿なのだが、自家発電機があつてビールは冷たいものが出てきた。食材などの保存もあるので冷蔵庫は必須なのだろう。

混浴の露天風呂もよかった。青森ヒバでできた内湯はその香りがとても気に入った。以降の私の温泉評価に関して香りを重視するきっかけとなった温泉だ。



【青荷温泉の湯】



【青荷温泉の玄関】

青森ねぶたの里でねぶたを体験し、奥入瀬溪流を経て十和田湖へ、そして乳頭温泉郷の「黒湯温泉」に泊まった。

黒湯温泉は妻が嫁に来る前に家族旅行をした温泉ということで、当時の写真を見せてもらったことがある。私にとっては初めての温泉だが妻たちにとっては20年以上前のことなので違う味わいになったのだろう。

乳頭温泉郷は当時でも人気の温泉で、硫黄臭が強い白濁の湯と秘湯感抜群の宿のたたずまいに私もすぐにファンになってしまった。

秋の味覚サンマを食するために最後は太平洋に出て気仙沼に行った。宿は「マリンサイド気仙沼」という海員組合の保養施設に泊まった。海なし県の群馬県に住む両親にとって、そして私にとってもサンマの水揚げ港として有名な気仙沼で旬の時にサンマを食べることは滅多にないことだった。そしてこれも相当に美味かった。

この旅行は大成功だった。しかしこの約一年後に父が亡くなったので、これが父と一緒に行った最後の旅行になった。

そのこともあって、私にはあの言葉「旅は行ける時に行く」が強く刻まれることになった。

■豪華クルーズを初体験

1994年4月ゴールデンウィークを使って11日間のクルーズに行った。私38才、妻37才、娘10才、息子6才、神戸港を出航し韓国、中国、沖縄に寄港する豪華客船での外洋クルーズだった。

これは個人旅行やパック旅行ではなく、会社の労働組合が主催した旅行で特別なものだった。

当時は日米貿易摩擦というものがあり、車や電気製品などの日本製品が優秀だったがために米国では日本製品が米国製品を圧倒していた。そのため日本人は働き過ぎだという訳の分からない米国の批判を受けていた。素直な日本人はがむしゃらに働くことをやめて“ゆとり”のある生活をしようという風潮になって、これを受けて労働組合が豪華客船を一隻チャーターして春の東アジア近海をクルーズするという今では信じられないイベントを実施した。そのゆえにこの船旅は「ゆとりっちクルーズ」と名付けられ、労働組合員とその家族合わせて575人が参加した。

船は「おりえんとびいなす」総トン数23000トン、全長174m、現在この船は日本では就航していないが、同サイズの姉妹船「ぱしふっくびいなす」は現在も大阪を母港にして就航している。

私にとっては2つの意味で初めての大きな体験の旅になった。

一つは外国に行く本格的な豪華客船に初めて乗った、それも家族で乗った。

もう一つはこのような豪華客船を一隻チャーターするような大規模な労働組合の行事に参加したことである。今では考えられないが、それほど当時の労働組合は強かった。

神戸港の出航時には何百、何千本もの紙テープが投げられて盛大な見送りになった。船旅とはこういうものなのかと私の脳にインプットされた。

これ以降私はクルーズ船の出航シーンを数多く経験しているが、この時の見送りが最も盛大で豪華だった。これは労働組合という組織力のなせる業だったのだろう。



【出航の紙テープ】

神戸港を出航してしばらくして船は瀬戸大橋の下をくぐった。瀬戸内海に沈む夕日が瀬戸大橋に映えていた。こんな光景は今まで見たことがなく感動的だった。

航海中の船内では様々なイベントが催されており、子供たちも充実した船内生活を送ることができた。娘は一輪車のサークルに入って世界チャンピオンから直々に一輪車を習うことができ、妻もいろいろなイベントに参加して船上生活を楽しんでいた。



【夕焼けの瀬戸大橋の下を通過した時の船のデッキ】

乗船した船を一つに国に見立てて「ゆとり共和国」という建国記念パーティが開催された。豪華な料理、アルコールもふるまわれた。子供たちも大はしゃぎして喜んでいた。

音響や映像担当もプロ顔負けの人たちが組合員にいて完璧にこなしていた。普通ならば音響や映像機材の管理運営とエンターテイメントは船会社側の仕事で乗客側は提供を受ける側だが、それをこなしてしまうことに驚いた。

エンターテイメントの役者もそろっており、パントマイムをする人、一輪車の世界チャンピオンも乗船している。それが同じ会社の組合員というから凄いと感じ、こんな仲間と一緒に働いているのかと驚いてしまった。

食事は毎日フルコース、それも和洋中と変化に富んでいた。船の食器は全て有名な「ノリタケ」のブランドで食器も食事も豪華そのものだった。

朝昼夜の3食の他に早起きをした人が朝食の前に食べるアーリーモーニング、夜遅くには夜食も提供された。それ以外にもビュッフェレストランが全日オープンしているので夜中以外は何時でも食べることができた。これは今の私にとっては当たり前のことだが、クルーズ初体験の当時の私にとってはあまりに衝撃的だった。

日本船なので大浴場も完備されており、船が揺れても湯がこぼれないように浴槽が深くなっていたが、船が揺れるたびに浴槽の湯が大きな波になって動いていくのは面白かった。

最初の寄港地の釜山は交通機関も発達しているので、私たち家族は自由行動を選び地下鉄を利用し市内散策をした。

タクシーに乗って釜山の北方にある有名な禅寺の総本山「梵魚寺（ポモサ）」に行った。私はこの時初めて日本以外で仏教の寺を拝観した。そういえば年配のタクシーの運転手とは日本語で会話をしたことを思い出す。

有名な国際市場にも行った。衣類、雑貨、電気製品などが格安で売っており、地元客のみならず観光客も多い活気ある場所だ。屋台も多く並んでおり、私たちは韓国風お好み焼き「チヂミ」を食べた。最近は日本でも食べられているが当時は珍しかった。味はもちろん良かったが、やはり本場で食べることに意味があるというものだろう。アルミニウム製の箸で食べるという文化に、やはり韓国は最も近い隣国だったと痛感した。



【釜山の国際市場でチヂミを食べる】

中国は天津港に入港した。さすがに当時の中国は治安上の問題もあるので1泊2日の内陸ツアーが組まれ、全員がバス13台に分乗して北京に向かった。

車列の先頭と最後尾には北京市の交通当局のパトカーが付いた。それは完全にVIP待遇だった。パトカーの先導で、後続のバスも全ての車両はハザードランプをずっと点滅させて赤信号も無視して進み、さらに渋滞して前が詰まってくると対向車線を走った。当時の中国は今ほど車が多くはないが、自転車はすさまじく多く、それらの自転車に当たるのではないかと心配するほどだった。中国という国家における特権階級への厚遇を改めて実感した。

この厚遇の理由は私たちの会社の創業者が中国の指導者の鄧小平に技術支援を約束し、会社をあげて中国の近代化を手伝ったからだ。

厚遇は北京で開かれた歓迎会もすごかった。当初はあの人民大会堂の宴会場を使用する旨の申し出があったらしいが、さすがに丁寧に断ったという話を聞いた。食事には本場の北京ダックが並び、中国雑技団の芸もすごかった。それらの芸はとても人間技とは思えなかったが、これが中国4千年の歴史なのだと感心した。

天安門広場、万里の長城、故宮（紫禁城）、明の十三陵など有名観光地の他に、中国との合弁企業の工場見学も行った。万里の長城では凧揚げをした。船の中でそのために凧作り教室が開催されて、自作の凧を万里の長城で上げるという画期的なことをやってのけた。

帰国して、これだけ見て回って天津から1泊2日で行ったことを友人に話したら、彼は渋滞でそれは不可能だと言っていた。私は彼にパトカーの先導のことを伝えたと、すぐに納得した。



【天安門広場】



【北京での歓迎会】

天津を出港してからは1日だけ沖縄の那覇に立ち寄り、レンタカーを借りて観光地を巡った。あとは洋上のクルーズ生活を十分に満喫した。

季節の良い5月なので天候にも恵まれ、船のデッキではBBQパーティが開かれた。生バンドの演奏や、娘が入っていた一輪車サークルの発表会なども開かれた。

そこで船上結婚式が行われた。新郎新婦にとっても乗客にとっても記念すべきイベントになるはずだったが、残念ながらこのカップルは下船後早々に離婚したという。



【BBQ パーティでの一輪車の発表会】

そんな結婚式もあれば、クルーズ期間中には私たちの結婚記念日さらに娘の誕生日もあったので、レストランで盛大に祝ってもらった。大きなケーキとワインを頂き、娘は一輪車の先生からプレゼントをもらうというサプライズもあった。

最終の夜はメモリアルパーティが開かれた。ベストドレッサーを決めるということで乗客は皆着飾ってパーティに参加した。これはファッションショーではなく、クルーズ船におけるドレスコードの正装でもなく、もっと気ままで和気あいあいとしたものだった。家族連れや独身者たちが思い思いのお洒落をして、気品はもちろん、綺麗や可愛いというものにアイデアも加わって、一味違うものになった。その後に私が経験するクルーズ船では味わうことがないものだった。

神戸港で乗船したからクルーズを振り返る名場面を編集したスライドやビデオの披露もあり大いに盛り上がった。もちろんその編集は組合スタッフが徹夜でやったのだろう。

毎日各船室には、日々船内でどんなイベントがあるかの伝える新聞「ゆとりっちタイムズ」が届けられていた。クルーズ船では当たり前ののだが、初体験の私にとっては実に新鮮で感心した。そしてこの新聞も労働組合のスタッフが毎日編集して印刷していた。

時刻		6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23
日時																			
1	4/24 (日)							・兼 合 ・モ 配 ・受 取	・出 国 ・手 続 ・出 港	出 港 荷物整理	オリエン テーション (全員)			サンセット クルーズ	帰国記念 パーティー (全員)		カラオケ ディスコ他		
2	4/25 月		朝 食 入国オリエン テーション	T V	人生占い 一輪車 カラクリニク		早 食	新山崎 韓国		A 慶州1泊2日 B 釜山1泊2日	C 釜山(船中泊)コース D 韓国式宴会とカシノ	E 釜山市観光、ゴルフ F 夕食とコースフリー							※船中泊 の門限 は23時
3	4/26 火		朝 食	韓国	引き続きオプショナルコース				乗船	完了 パスポート回収	釜 山 出 港	夕 食					ジャズの夕べ、カラオケ、 星座教室他		
4	4/27 水		朝 食	T V	各種サークル教室 イ ベ ント		早 食 入国オリエン テーション		中国語会話、一輪車、英会話、 カラオケ講座、人生占い他			夕 食					シングルスパーティー他		
5	4/28 木		朝 食	天津着 中国	…全休行動…(訪客見学)	(昼食)	(昼食)	BMCC M C B	友 誼 商 店 (ショッピング)	天安門広場 (記念撮影)	北京飯店 (交流会)	新世紀飯店 (贈 送)							
6	4/29 金 みどりの日		起床5:30 朝食6:00		(万里の長城) (全休イベント)		(朝 食) (ショッピング)	(定食、昼食) (グループ別)	(友誼商店)	(天津・レストラン) (夕 食)							乗船	出国(一括審査) 完了 荷物整理	天 津 出 港
7	4/30 土		朝 食	T V	パントタイム、エア ロビクス、ビデオ教 室、一日船長他		早 食		カラオケ講座、気功、人生占い、英会話、バンド他		夕 食						バラエティショー、カラオケ、 星座教室他		
8	5/1 日 メーデー		朝 食	T V	カラクリニク、 パントタイム他	船上 結 婚 式	ゆとりっち フェスティバル		一日船長、一輪車、バンド、ビデオ教室、 カラオケ講座他		夕 食						カラオケ大会、英会話他		
9	5/2 月		朝 食	沖縄着 日本	A 南部観光めぐり B 中北部観光	C ビー チ D ゴ ル フ	E フ リ ー		夕食コースⅠ 夕食コースⅡ	フリー シャトルバス							●21時一乗船完了 荷物整理		沖 縄 出 港
10	5/3 火 憲法記念日		朝 食	T V	カラクリニク、 パントタイム他		早 食 帰国オリエン テーション		船内オリニピック 英会話、メイクアップ、 人生占い、エアロビクス他		メモリアル パーティー (全員)						ディスコ、カラオケパブ		
11	5/4 水 国民の休日		朝 食	T V	オークション		早 食		神戸 帰 港 (税関審査は一人ずつ行います。パスポート、申告書を提示) ●各交通機関で帰路へ ●宅配サービス準備										

【日程表】



【ゆとりっちタイムズ 帰国後に発行された思い出編】

費用は大人 18 万円、子供 12 万円で、これ以外の支出は釜山と沖縄の自由行動で使った費用が 4 人で 1〜2 万円程度だった。11 日間の移動、宿泊、豪華な食事が付いたクルーズ費用なので当時としてもかなり安かったと思う。ただこの費用はおそらくは労働組合から補助が出ているので、必ずしも世間相場とは一致しない。何しろ横浜から神戸までの 4 人分の新幹線の費用も全額出してもらった。

豪華客船の旅とはこんなにも素晴らしいものなのかと感激する日々だった。そしてそれは今になって思うことだが、当時の日本の勢いというものを強く感じられるものだった。

さすがにこのような労働組合のイベントはこの後実施されていない。

第四章 子連れでない旅

■エジプト&ギリシャ

30 代は小さい子供連れの旅ばかりかと思っていたが、記録を調べるとそうでもないことが分かった。それはエジプト、ギリシャに行った旅だ。

1986 年 11 月、私は 30 才になり結婚 5 周年を迎えた。それを記念して、と言うかそれにかこつけて夫婦で 5 千年の歴史を誇るエジプト、そしてギリシャを旅した。

今思うと何と無謀でこんなことが許されるのかというもので、2 才半の娘を妻の実家に預けての旅だった。後から妻の母親から聞いた話では娘は「パパは会社、ママは買い物」と毎日言っていたというが、本当は泣き叫んでいたのだろう。妻の両親には感謝の言葉しかない。

この旅行はパックツアーを利用したが、参加者は 30 人くらいで圧倒的に女性が多かった。私たち夫婦を含めカップルが 3 組いて、私たち以外は新婚と定年後の熟年カップルで、結局男性は私を含めて 3 人だった。

女性の大半は当時の私たちと同じくらいの 30 才前後のアラサーが多かったが、その中でも異彩を放っていたのは少し腰が曲がった 70 代の女性 3 人と、その 3 人に同行してきた比較的若い女性だ。その彼女から間柄を聞くと 70 代の女性たちは祖母とその姉妹といい、これには私は驚いた。それは当時 30 才の私でも“きつい旅”で、この人たちは大丈夫なのだろうかと思い、それを面倒見ている彼女にも脱帽した。

きつい旅という理由はまずはフライトで、私たちがその 5 年前に行った新婚旅行は日本からフランスのパリ行きなのでアンカレッジ経由だったが、日本からエジプトのカイロには南回りルートが使われていた。距離が長いので途中でタイのバンコクと、アラブ首長国連邦（UAE）のアブダビに給油で立ち寄り、都合 30 時間くらいかかった。アブダビでは飛行機の中に自動小銃を持った兵士が数人乗り込んできて不審者を探すのだが、さすがにこれには緊張した。

エジプト国内でも交通手段の関係で夜遅くホテルにチェックインしても、翌朝の出発が 4 時ということが 2 回あった。これは若者でも相当にきつかった。

そんな思いをしてもエジプトを訪れる理由はやはりエジプト文明の謎と魅力だろう。ギザの三大ピラミッドとスフィンクス、ルクソールの神殿や王家の谷など、誰もが一度は行ってみたい場所だ。私もずっと昔からいつかは行きたいと思っていて、実際に行ってもそれらは私の期待を裏切らなかった。本物のエジプト文明と対面して本当に 5 千年も前からこのエジプトは存在していたという実感が湧いてきた。



【ギザの三大ピラミッド】

ピラミッドにしても建造当時のまま残っており、どうやって建設したのか、ファラオの呪いは本当か、などと桁違いのスケールとミステリーとが入り交じって複雑な気持ちになった。

観光客が入るピラミッドの入口は盗掘者が開けたもので、当然財宝も何もなく、殺風景な部屋の真ん中に半分壊れた石棺だけあった。臭くて蒸し暑かったことを覚えている。

ルクソールにある王家の谷の王墓もみな盗掘されていたが、こちらは壁画が当時のまま残っていた。唯一盗掘されなかったツタンカーメンの墓は 3300 年前そのままに残っていた。

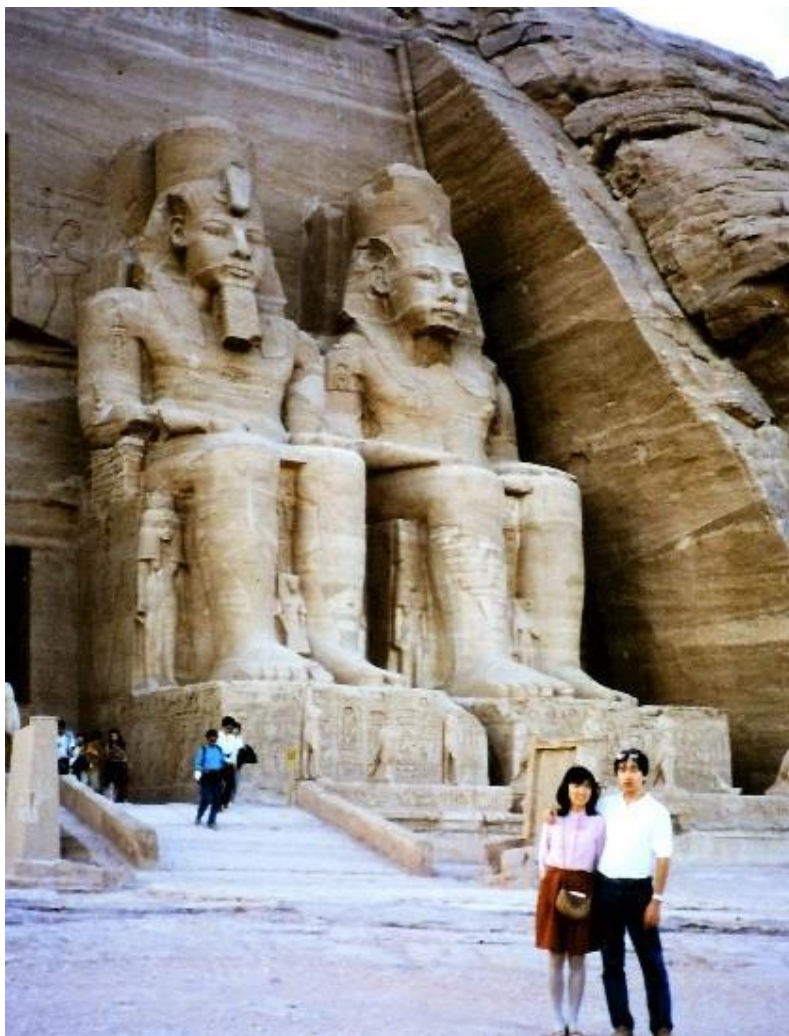
日本ではツタンカーメンと言っているが現地では「トゥットウ・アंक・アメン」と呼ばれていた。最初私はそれが何のことか分からなかったが、実は現地のアラビア語の表記を英語にして素直に読むとそうなる。

やはり実際に現地に行かないと分からない。そういう事の方が圧倒的に多い。

数年前に行ったイタリアのポンペイ遺跡の地元ガイドの言葉で、今では私の遺跡見学のポリシーになっている「遺跡は当時の生活を想像して見ろ」というのがある。しかし現在の私でもエジプトの当時の生活はなかなか想像できない。それほど古代エジプトは私の想像を超えている。

エジプト観光の定番ではあるが、あまり知られていないアブシンベル神殿とアスワンハイダムで、私は別の驚きを感じた。

アブシンベル神殿を建造した王はラムセス 2 世で紀元前 13 世紀の頃、ツタンカーメンの少し後になる。その後砂に埋もれていたが 19 世紀に発掘された。



【アブシンベル大神殿 ラムセス 2 世の像は 4 体ある】

エジプトはナイルの賜物と呼ばれていて、ナイル川の氾濫で沿岸地域の土地が潤ってエジプト文明が成立したことは有名だが、現代になると氾濫は困ったものになる。そこで 1960 年代、ナイル川にアスワンハイダムの建設計画が持ち上がった。

ダムができるとアブシンベル神殿が水没するのでユネスコ（国際連合教育科学文化機構）によって国際的な救済活動が行われた。いや時間の経過を正確に書くとダムは既に着工しており、アブシンベル神殿は水没の危機が近づいていた。エジプト政府は当初これらの神殿を水没させる予定でいたが、世界各地から避難の声があがり無視できなくなり慌ててユネスコに相談した。ユネスコは世界中の識者に救済を依頼した。その結果、遺跡を分割して移設することになった。しかしダムの工事は止めることなく行われており、水没と移設作業との競争になった。

しかし、この大きな神殿を移設するには膨大な資金が必要になり予算が足らなくなった。そこでエジプト政府は門外不出だったツタンカーメンの秘宝を外国に出張展示することで資金を集めた。日本にも 1965 年にやって来て、そのニュースは当時 9 才の私にもかすかな記憶がある。

神殿は約 1000 個のパーツに分割され、ナイル川から約 210m 離れた丘へ 4 年間かけて移築された。今はアスワンハイダムによってできたダム湖のナセル湖を見下ろすようにたたずんでいる。

この大規模な移設工事がきっかけとなって、人類の貴重な遺跡や自然を守るための世界遺産という制度が 1972 年に創設された。

この神殿を訪れた時、私はその事情を知らなかった。内部に入ると他の古代エジプトの遺跡や王墓と同様に神秘的で、暗くひんやりとした空気が漂っておりファラオの呪いがかけられているかのような恐怖さえも感じた。ところが外に出て裏側にまわると人工的なドームに包まれていて、本当に驚いたことを覚えている。あのひんやりとした空気はエアコンによるものだったのか。

このダム湖のナセル湖の大きさに当時の私はさらに驚いた。いや、今でもこんな大きなダム湖は見たことがない。全長は 550km もあるから直線では東京から岡山くらいになる。移動のためにダム湖の上空を飛行機で飛んだが 1 時間以上もかかった。

私が知っていた日本のダムとは桁違いで、その形状も全く異なっていた。

アスワンハイダムはロックフィルダムという構造で、日本人がイメージする反り立つ壁のような堤防ではなく、上流のダム湖に向かって下流の放流側に向かってもなだらかな傾斜の堤防になっており堤防の表面は大きな岩を積んでいる。だからロックフィルという名前なのだろう。堤防の高さは 111m、堤防の長さは何と 3.6km もある。

このダムはソビエト連邦の援助で造られた。友人が機銃掃射され拉致された悪の大国のイメージだが、私は少しだけ見直した。

アスワンにある石切り場で面白いものをみた。それは切り出し途中のオベリスクで、何らかの理由で切り出し作業をやめたものだ。

オベリスクは古代エジプトの太陽神を象徴する石の柱で、大きな石を切り出して作られた。断面は四角形で上方に向かって細くなっており、先端はピラミッド型の四角推になっている。古代エジプトで数十本が作られたが、現在のエジプトに残っているのは少なく、戦利品や友好の証などとして世界各国に持っていかれた。

現在はその形を模造してモニュメントとして世界中で見かけるが、パリのコンコルド広場、ニューヨークのセントラルパーク、ロンドンのハンガーフォード橋近くのものは古代エジプトで切り出された本物だ。



【切り出し途中のオベリスク】

私たちが使ったバックツアーはエジプトの他にギリシャもセットで組まれており、エジプトから地中海の対岸にあるギリシャに渡った。

アテネの市街地を巡り、定番のアクロポリスの丘に登りパルテノン神殿を見た。日帰りながらエーゲ海クルーズも楽しんだ。エギナ島、ポロス島、イドラ島に寄港して白い建物の綺麗な街並みを歩いた。

普通ならばギリシャやエーゲ海は素晴らしい場所なのだろうが、実は私はもったいないことをしたと後悔した。エジプト一国に絞っておけば良かった。あるいは先にギリシャに行って後からエジプトならば良かったのかもしれない。

何しろ 5 千年の歴史の壮大なエジプトに対して、ギリシャはそれよりも新しい都市国家で当然スケールも全く違う。私にとっては謎もなければワクワク感もなかった。残念ながらエジプトで感じたような感動は、ギリシャでは全く感じる事がなかった。

アテネの街は明るく綺麗でパルテノン神殿は既に完全に役目を終えた単なる石の柱だけの遺跡にしか見えなかった。



【アテネのパルテノン神殿】

エジプト、ギリシャ 8 日間の旅はツアー料金 248000 円、夫婦二人で約 70 万円になった。

やはり欲張らずにエジプトだけに絞っておけばよかった。あるいはどうしてもエジプトとギリシャの両方に行きたいならば、その 2 つの文明や遺跡を対比させるという目的を持って行けばもっと違った感想になっただろう。

この教訓はその後の私の旅のプランニングに生きていくことになる。

■飲み友との旅

会社の同僚で飲み友の鎌仲とは、会社帰りに飲みながら旅行の話で盛り上がるようになり、忙しい仕事と子育ての合間に男二人で小旅行に行くようになっていった。それは毎月の残業時間が常に 100 時間を簡単に超える企業戦士のささやかな抵抗だったかもしれない。

最初は 1987 年 6 月、私が 31 才の時に JR 東日本エリアの新幹線も含めて全ての列車が乗り放題の「EE 切符」という便利な切符が発売された。それを使って鉄道の旅に出て気仙沼、釜石、そして日本海側のあつみ温泉に行った記録が残っている。当時の EE 切符は 1 万円だった。

翌年 1988 年 5 月も同じく EE 切符を利用して北海道函館まで足を延ばした。

函館の夜景は絶景だがここで食べた寿司が絶品だった。酢で締めていない生の鯖で、味と触感はマグロの大トロのようだった。私はこのような鯖は初体験で相当感激したので、それ以降北海道を訪れる度に探したが見つからなかった。30 年以上経った今もその寿司とは出会っていない。

五能線に乗り十二湖の旅館に泊まった。宿には竜神の湯という風呂があつて、地元の竜神様のお告げで開湯したと書かれていた。ここは白神山地の麓で、この 5 年後に白神山地は日本で最初の世界遺産に登録された。これも竜神様のお告げだったのだろうか。

最近になって分かったことで、十二湖は世界遺産区域だと私は思っていたが実は違った。白神山地の世界遺産区域は入山許可が必要で簡単に入れない。

さらに翌年の 1989 年 8 月、今度は青春 18 切符を使って日本海の粟島、飛島に行った。

夜行列車で新潟県の村上に行き粟島に渡り民宿に泊まった。民宿の朝食は浜に出て「わっぱ煮」という郷土料理を食べた。杉の薄い板を円柱状に曲げて作った「わっぱ」という器に味噌ベースの出汁汁に魚、キノコ、ネギなどの具材を入れ、最後に高温に熱した大きな石を入れる。その熱い石の投入によってブクブクと勢いよく泡が出る豪快な料理だ。

一旦本土に戻り、山形県の酒田から飛島に渡った。島の食事はどの島でも自給自足が基本なので民宿の夕食のお膳には海の幸がいっぱいに並んだ。そんな豪華な食事なのに民宿の 2 食付きの宿泊費は 5000 円という記録が残っている。

どちらの島も手つかずの自然に覆われた緑豊かな島で、海水浴、釣り、バードウォッチングなど自然を存分に楽しむことができる。

あまりに感動したので翌年に家族を連れて粟島を再訪した。



【各駅停車の気ままな旅】



【飛島の民宿の夕食】

私はそんな島の旅が徐々に好きになっていった。さらに鉄道の旅も合体し、のんびりと車窓を見ながらビールを飲んでいれば港に着き、島に渡ればさらにのんびりとした別世界が待っている。当時の私は仕事が滅茶苦茶に忙しかったが、本当に解放されリフレッシュすることができた。

1990 年は能登半島の北方にある舳倉（へぐら）島を目指した。夜中に車を飛ばして早朝に石川県の輪島に着いて、仮眠して輪島港から北へ約 50km の日本海に浮かぶ舳倉島に渡った。この船は定期船だが、絶海の孤島のようなこの島を知っている人は少ない。

島の周囲は約 5km、最高標高は何と 12m という島で、当時は 200 人くらいの島民がいた。民宿に泊まったが、もちろん飲み屋もなく夜 8 時には島全体が静まりかえっていた。漁業の島なので朝が早いので夜も早いのだろう。島の北側の海岸ではハングル文字の漂流物がたくさん転がっていた。ラジオ放送は朝鮮語の放送が非常によく入った。

最近調べたら島の人口は 100 人ほどに減少しており、本土に家がある人が多いので実際に冬を越す人は 20～30 人だという。この島はアワビやサザエなどの水産資源に恵まれているが、冬の日本海は荒れるので漁をする夏場だけこの島で過ごすからだ。

以降も同じような旅を年に 1～2 回続けていた。これらの旅が後に私を鉄道の旅、島の旅、温泉の旅に誘い込んでいったのは言うまでもない。

■怒涛の 3 日間日本一周

1997 年 3 月、鉄道による日本一周を実行した。

これは JR 発足 10 周年の記念切符が発売されたのがきっかけで、この切符は新幹線を含む JR 全線が 3 日間乗り放題というものだった。

これもまた飲み友で旅友の鎌仲を誘ったら「これはもう行くしかないね」という返事が返ってきて、3 日間の日本一周旅行を思いついた。JR 貨物以外の JR 各社に全て乗るという計画を立て、行程は以下のようなものでひたすら列車に乗っていた。

1 日目、東京駅 6 時発の新幹線に乗って、特急を乗り継いで札幌に到着したのは夜の 7 時になっていた。サッポロビール園でジンギスカンをたらふく食べ、ビールもたくさん飲んだ。そしてすぐに夜行列車に乗って青森に向かった。これは寝台車ではなく通常の座席だったので、あまり寝た気分にはならなかった。

2 日目、明け方に夜行列車は青森に到着し、懐かしいスタイルの特急列車「白鳥」に乗り換えて日本海沿岸を南下し車窓の景色を楽しんだ。大阪に着いた時はもう暗くなっており、新幹線と特急を乗り継いで瀬戸大橋を渡り夜遅くに高松に到着した。ビジネスホテルに泊って、初めてベッドに寝ることができた。何しろ 2 日間列車乗り続けて座り疲れていた。



【青森駅で「白鳥」と私】

3 日目、高松を朝早く出発し岡山から博多まで新幹線に乗った。九州新幹線は当時まだ開通しておらず特急を使って熊本まで行った。熊本が当日帰宅できる限界で証拠の記念撮影をして、すぐに U ターンして夜遅く自宅に戻った。熊本駅の時計の針は 1 時 44 分を指していた。

当時は新幹線が今のように延びておらず、特急列車といえども結構時間がかかるので列車に乗っているだけの日本一周になった。観光はおろか駅にもあまり降りていないので、車窓以外の景色はほとんど見ていない。

列車に座ってビールを飲むだけの鉄道旅はまさに「怒涛の 3 日間鉄道日本一周」だった。

1 人分の費用は記念切符が 3 万円、宿泊代と飲食代が約 1 万 6000 円で、合計約 4 万 6000 円の日本一周になった。

3 日間日本一周で 4.6 万円というこの数字は、また興味深い数字になった。1991 年から 4 年越しの分割日本一周は 44 日間 65 万円、学生時代の日本一周は 50 日間 75 万円、奇しくも期間（日数）と費用（万円）の比率が 2:3 だったが、今回もまた 2:3 になった。

この鉄道による 3 日間の日本一周旅行が、約 20 年後に実行する 12 日間の日本一周の鉄道旅のきっかけになったのは言うまでもない。その旅行記は「日本一周鉄旅 2018」として公開されている。

■1日目

東京6時～札幌 ビール園で夕食
札幌～青森へ夜行列車

■2日目

早朝 青森～大阪～高松

■3日目

高松～熊本～東京



【怒涛の日本一周ルート】



【3 日目の熊本駅前 1 時 44 分】